

『奇貨』

労働者委員 海蔵伸一

画期的な治療法や有効なワクチンが未成熟な中、新型コロナウイルスの感染者数は世界で1億人に到達していると想定されています。国内でも新たな感染拡大の波が押し寄せ再度の「緊急事態宣言」が発せられました。

連日の感染状況の報道にはいささか辟易としてしまっていますが、コロナ禍で社会を支えている仕組みや価値観の限界が見えてきたのではないのでしょうか。世界が払った代償を考慮すれば、「元に戻る」を切望するのではなく、「どう変わる」を模索し私たちの常識を捨てる必要があるのかもしれない。

世界中でロックダウン等により経済活動が停滞したことにより、炭素排出量が最大で17%減少したそうです。これまでに大気汚染で霞んでいた山々が鮮明に見えたり、観光客がほぼゼロになり本来の姿を取り戻した運河もあります。また、各国で外出・渡航などの移動制限がされたことで、環境地震ノイズと呼ばれる振動が大きく減少し、地震観測も容易になったそうです。私たちの生活や経済活動がどれほど地球環境に影響を及ぼしているのか痛感させられます。

近年、「生物多様性」と環境問題の関連性も研究され、複雑で多様な生態系が自然環境の悪化でこれまでにない速さで失われつつあるとされています。未知ウイルスに限定すれば、従来の病原体にも本来の生息地があり、その生態系が破壊されることにより、新たなウイルスの出現につながる。そして、グローバル化された人間社会で瞬く間に拡大する、というものです。

私たちは、自然の驚異に抗うことはできませんが、その自然の驚異を助長しているのではないのでしょうか。日本は、温室効果ガス排出量を2050年までに実質ゼロにする目標を宣言しています。環境の取り組みを重視するESG投資の広まりも背景にあります。しかし、「経済」と「自然環境」の両立は、私たちが想像する以上に難易度の高い挑戦だと考えます。しかし、新型コロナウイルスの発生は、“自然からの警告”と捉えることができる現実の中で、コロナ禍を『奇貨』（滅多にない機会）とし、どう変わるかがすべてに問われているのではないのでしょうか。

前述の世界で起きた環境変化は、あくまでコロナ禍の一時的なものかもしれません。今ある環境問題は何十年もかかって形成されたもので容易に浄化することなど到底できませんが、世界の人々が美しい風景に気づき、きれいな空気を吸い、鳥のさえずりに耳を傾けることができた経験は、利他的な行動につながるのではと期待せずにはられません。そして、私自身の行動もどう変えるのか考えてみたいと思います。